ア　「みんなちがってみんないい」（１年生）

自分の好きなものを選び、理由を発表することで、多様な考え方があることを知る機会を設けた。お互いを認め合い、上手に話を聞くための「あいうえお」について学び、実践ができるよう日常指導へとつなげた。

イ　「じょうずに話を聞こう」（２年生）

上手に話を聞くためには、どんなことに気を付けたらよいのかをロールプレイングを通して学んだ。また、話している人の気持ちを考えることの大切さも体感した。

ウ　「自分の気持ちを伝えよう」（３年生）

「上手な断り方」というテーマをかかげ、ロールプレイを通して相手に自分の気持ちを伝えるときに気を付けたいことを学んだ。

エ　「わたしたちのまち」（４年生）

課題を解決するためには、メンバーの協力が必要であることを、グループワークを通して学んだ。

オ　「もめごとを解決しよう」（５年生）

友達との意見が対立した時やもめごとが起きた時に、どのように解決したらよいかを学んだ。

カ　「小学校から中学校へ」（６年生）

中学生になると自己決定をしたり、自分で困難を乗り越えたりする場面が多くなる。そこで、６年生では自分を支えてくれる周囲の人について考えたり落ち込んだりした時、どうやって乗り越えていったらよいのかを考えた。

令和２年度は、感染症予防や授業時数の削減もふまえ、各校の実情に合わせ実践を工夫した。

キ　小幡小学校

児童の実態から担任が必要と判断する場合には「９年間を見通した指導計画」に基づいたスクールカウンセラーとの授業を実施した。２年生「じょうずにはなしをきこう」では、マスク着用時には表情が見えにくいため、聞く姿勢も大切になることを学ぶ機会となった。

ク　福島小学校

年１回の指導では、なかなか身に付かないことも多いことやコロナ禍で授業時数が削減されたことを踏まえ、本校には朝の活動（クラスの時間：週１回）として１５分間の時間が設定されている。その時間を利用して、５分間でできるコミュニケーションワークを計画的に行い、更にその日の帰りの会で、振り返りや全体シェアリングを取り入れることで、ピアサポート力の向上を目指した。

本年度は、児童の実態から５年生においてこの実践を行った。その他の学年は、教科指導の中で意識しながら実践したり、今まで通りスクールカウンセラーとの授業を行ったりした。

ケ　新屋小学校

新型コロナウイルスによる休業で授業時数が減り、例年のように学活として授業を行うことができなくなったため、短時間でできるピアサポート活動を計画した。実施する内容は、感染防止を第一に考え、精選した。また、本校は朝活動の時間がないため、各クラスで朝の会や授業の隙間時間などを活用し、実施した。

【実施内容】

・全学年「今日の気持ち天気」
　自分の感情を天気で表し、自分の感情の変化や、仲間の感情を考えた行動ができるようにする。
・低学年「その場でエアーマラソン」「気持ちを合わせて手を叩こう」
　簡単な活動を行うことによって、クラスの一体感を味わい、気持ちを共有する。
・高学年「セルフチェックをしてみよう」「セルフエールを贈ろう」
　自己分析を行い、自分を認めることによって自信を持てるようにする。

＜中学校の実践＞

中学校では、小学校での積み重ねを生かした指導に取り組んだ。心の健康教育を充実させることで、「心の健康教育」の良さを実感させ、自己有用感をもたせること、正しい判断力をつけること、互いを認め合い高め合える集団を作ることに、つなげられるようにした。

【 目指す生徒の姿 】
自分の判断で、「いいこと」が遠慮なくできる
仲間同士支え合うことができる（ピアサポート）

ア　「人間関係づくり」（全学年）

生徒の実態に応じて、学級や学年、または全校で活動を行った。「さいころトーク」「間違いさがし」「先生だけが住んでいるマンション」など、お互いを知ったり、協力して課題をやりとげることで関係を深める

ことができた。生徒会朝礼の「おやつの時間」では、「じゃんけん列車」「そーれ集合」「サインを集めよう」などで異学年の交流を行い、つながりを深めることができた。令和２年度は、感染予防の関係から、グループワークなどの機会が持てなかったが、陸上大会では長縄の回数跳びを全校種目とし、各学級３チーム編成での学級対抗にした。各学級とも生徒同士で作戦を考え、それぞれの良さを活かすとともに、励まし支え合いながら協力して取り組むことができるよい機会となった。

イ　「ストレスマネジメント」

ストレスについて学び、一人ひとりがストレスと上手に付き合うことで、周囲の人へも思いやりの心で接することができるようになることを目指した。１年生「自分の考え方のクセを知ろう」２年生「よいコーピングは自分を助ける」３年生「考え方が変わると結果が変わる・認知行動療法」を行った。

ウ　「もめごとの解消」（部長・副部長）

各部の部長・副部長、生徒会を対象としたピアサポート研修では、もめごとを解消するための話し合いの仕方について学んだ。

エ　「親子ピアサポートトレーニング」

一日入学の際に、親子でペアになり「よくない話の聴き方・よい話の聴き方」を実際に体験した。小中学校での取組について、保護者に理解いただき、家庭でも活かしてもらうことを目指している。

②思いやりアンケート（毎月実施）

毎月自身の行動を振り返る機会を設けることで、思いやりに対する意識の向上を図った。項目は、甘楽町小・中学校「生活・学習ガイドライン～９年間の発達と学びとつなぐ～」で記載している内容となっており、発達段階に応じて項目が変化する。できている項目には○、できていない項目には×をつける。

令和元年度は、毎月行うなかよしアンケート（生徒指導：いじめに関するアンケート）の裏面を用いてその月だけのふり返りをさせていたが、令和２年度は、更に意識の向上が図れるように、前月の結果を比較できるようにした、右のようなアンケート用紙を用いた学校もあった。

思いやりの心も育てよう！

③異学年交流（縦割り掃除、縦割り遊び、縦割り集会等）

上級生は下級生の面倒を見たり、下級生は上級生を敬ったりして、思いやりの心が育まれている。

④職員研修

令和元年度、ピアサポートトレーナーを講師に招き、町内各校で職員研修を実施した。研修では、ピアサポートとは何か、ピアサポートの効果、プログラムの作成方法を学び、ピアサポートは子どもたちの育ちを支える活動であることを共通理解する機会となった。ピアサポート活動を通して、子ども達の自己理解・対人関係力・問題解決能力を高める活動を通して自尊感情を高める効果が期待でき、思いやりのある環境は（a）「子どもの成長の促進」、(b)「いじめや不登校などの問題の予防」につながることを再確認することができた。

（２）成果と課題

①成果

・小小連携、小中連携をして、ソーシャルスキルトレーニングやグループワークトレーニングを計画的に実施したことで、９年間を通して子どもたちは、仲間と支え合える力を育むことができてきている。
・コロナ禍で学級活動の時数が減ったことや感染予防のために、今までのように各学年年１回のスクールカウンセラーとの授業ができない学年もあったが、目指す児童像や学年ごとのめあての達成に向けて、それぞれの学校で工夫することができた。
・アンケートの結果、全学年が全ての項目において「よくできている」「できている」と答えた児童が８０％以上を達成した学校もあった。
・毎月の思いやりアンケートを行ったことで思いやりに関する意識を高めたり、自分自身を振り返ったりする機会をつくることができた。
・職員研修でピアサポートについて職員が学ぶ機会を設けたことで、共通理解のもと児童生徒への指導ができるようになった。

②課題

・“優しい言葉づかい”“自分の気持ちを伝え友達と分かりあおうとする力”は、アンケート結果からも、更に継続指導が必要である。
・高学年になるにつれて友達に「くん」「さん」をつけて呼んでいる児童が減少している。共に過ごす中で、親しくなり、あだ名等で呼ぶようになると考えられる。相手の不快にならない呼び方をするよう引き続き指導していく必要がある。
・思いやりの心は個人差が大きく、成長の速度も一人一人異なる。今回小学校で同一の指導計画を用いて指導を行ったが、それぞれの学校、学級の実情に応じた指導計画へと練り上げ、より実用的な指導にすることが必要である。

③今後の取組

甘楽町全体で９年間を見通した計画的に継続した指導や、児童生徒の実態に応じた日常の指導を継続して行うことで、仲間同士で支え合える力、ピアサポート力を付けることにつなげていきたい。

Ⅷ　研究のまとめ

昨年度より２年間の指定で始まった本研究であるが、ようやく推進体制が整ってきた矢先の今年３月からコロナ禍による３ヶ月間の休校、６月からの学校再開後も授業時数確保のための諸行事等の削減と縮小の中で、十分な実践活動ができないまま、まとめと発表の時期を迎える運びとなった。

改めて各校の実践を振り返ってみると、研究に向けて何か特別なことをしたというよりは、各校がこれまでずっと積み重ねてきていることを改めて目に見える形で整理した上で、町内小中学校４校で共有し、それぞれの教員が意識して実践することでさらに効果を上げていったという印象が残る。

甘楽中学校は５年前に統合して、町内唯一の中学校としてスタートしたが、開校当初より大きな混乱もなく、現在も大変落ち着いた生活ぶりである。全体的に挨拶もよくでき、毎日の授業や部活動にも集中して熱心に取り組む姿が見られる。それはまさに「感性豊かなかんらっ子」の姿と言ってよい。これは開校当時からの中学校の職員の努力によるところが大きいことは間違いないが、何よりもその基盤を作った小学校６年間の積み重ねが欠かせない条件となっていることも確かである。

当初の予定では、アンケートの結果等を活用しながら研究の成果を検証する計画でいたが、前述のとおりそれがままならない状況が現在も続いており、研究半ばの状態である。そもそも小中連携の成果は短期間の間に顕著に表れるというよりは、一人一人の児童生徒で考えれば、９年間でその成果がわかると考える方が妥当である。私たちは今後もこの実践と研究を継続し、年度ごとの成果と課題を確認しながら、より「感性豊かで主体的に学ぶ」甘楽町の児童生徒を目指してさらなる改善を重ねていく所存である。

最後に、本研究にあたり、西部教育事務所や甘楽町教育委員会の皆様を始め、多くの方々にご協力いただいたことに対して、深く感謝申し上げます。

＜参考資料＞　令和１・２年度　甘楽町小・中学校

『生活・学習ガイドライン　～９年間の発達と学びをつなぐ～』